

## 文 献

- 1) 新崎盛敏 1949 : 伊勢、三河湾産のヒトエグサに就いて、日水誌 15、137~143
- 2) 喜田和四郎 1966 : 伊勢湾及び近傍産ヒトエグサ属の形態並びに生態に関する研究、三重大水記要Ⅶ(1)82~164
- 3) Shihira, I. 1958 : The Effect of Light on Gamete Liberation in *Monostroma*, Bot. Mag, 71, 378~385
- 4) 須藤後造 1950 : 海藻の胞子の放出、散布及び着生に関する研究、海藻胞子付けの研究第8報、日水誌 16、1~9
- 5) 瀬底正武 1970 : 沖縄におけるヒトエグサの増殖に関する研究—I、游走子の放出時期と葉体の生長、琉球水試事業報告書、P 73~77
- 6) \_\_\_\_\_ 1970 : 沖縄におけるヒトエグサの増殖に関する研究—II、配偶子の放出と接合子の培養、琉球水試事業報告書 P 78~82

### (四) 沖縄本島東海岸および西海岸におけるヒトエグサの着生について

1969年から71年にかけて、沖縄本島東海岸および西海岸一帯を踏査しヒトエグサの着生状況調査を実施したので、その、概要を報告する。

なお、着生分布図は1969年度事業報告書に記載したのでここでは省く。

## 地 形 お よ び 底 質

### I 東 海 岸

主な入江、内湾を形成している地域は、中城湾、金武湾、大浦湾、有銘湾、平良湾で、沿岸地先は、細長いサンゴ礁のリーフ地帯がのび防波堤の役割をなし、したがって風波、波浪も穏な個所が多い。

沿岸より遠浅な所は干露出帯が広く底質も砂、砂利混が見受けられた。

北部は、岩盤が起伏し特に東村に面した地域は波浪が激しく海岸は深く入りこんだ個所が多い。

一般にヒトエグサの着生繁茂の条件としては、(1)内湾を形どった入江で、波浪、風波の影響が少なく、わりと平静な地域、(2)土砂の流出の少ない地域、(3)底質が砂利と石混及び岩板上で動揺の少ない基質であること等があげられるが東海岸を見た場合、平静で内湾を形どった地域としては、勝連村平敷屋同村の南風原がもっとも条件の良い場所である。

その他に適地と思われる個所は美里村泡瀬、中城一帯も一応考えられるが石油コンビナートの施設がなされている現状では不可能であろう。

### II 西 海 岸

西海岸一帯は、大宜味村以北を除いては、わりあいに静かな内湾に富み、ヒトエグサの増殖適地として好条件の個所が多い。しかし最近観光ブームで沿岸地先が埋立てられビーチや遊園地に利用

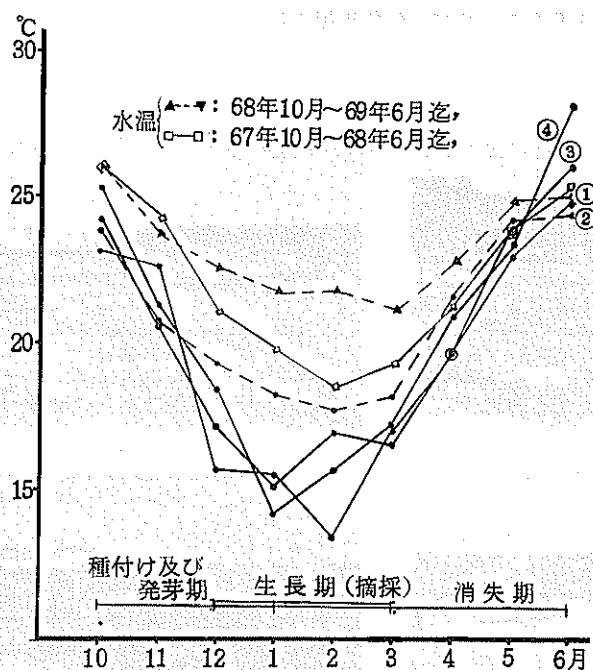
され年々干拓による地形の変動あるいは、山地開発による土砂の流出等という面から大きなわざわざいを残している。

## 着 生 基 質

ヒトエグサの着生基質は、ほとんど岩板上かまたは、動揺の少ない石あるいは雑木である。ヒトエグサの着生のみられない基質は、(1)激浪により常時洗い流されている基質、(2)砂のように動揺の激しい基質などで、このような基質は一度定着した休眠接合子（游走子裏に由来する）も細胞分裂の過程で破壊され、結局動揺の少ない基質に着生したものが生きのこって発芽生長しているものとする。

## 生 育 状 況

天然産及び養殖しているヒトエグサの生育状況は、1969年は全般的に伸長が見られず、養殖網の場合にはちぢこもっている状態である。これはヒトエグサのみでなく褐藻類のヒジキ(*Hizikia fusiforme*)、紅藻類のツクシアマノリ(*Porpyra crispata*)?、にもみられる現象である。



気温の変動 (琉球気象庁年報)

- ①: 67年10月~68年6月迄,      ②: 68年10月~69年6月迄,  
 ③: 69年10月~70年6月迄,      ④: 70年10月~71年6月迄,

ヒトエグサの生長と水温の関係について、1970年(筆者<sup>1,2)</sup>)の調査では、ヒトエグサに関する限り葉体の生長は、水温が低いほど良好である。それと関連して5ヶ年間の気温の変動<sup>3)</sup>(図に示した)をみると、68年11月の発芽期から69年2~3月の生長期にかけては、年度平均3°の高めである。そういったことから判断すると、初期発芽体が高温により何んらかの生長阻害を受けるのではないかと。今後継続調査することにして、ここでは参考までに記しておく。

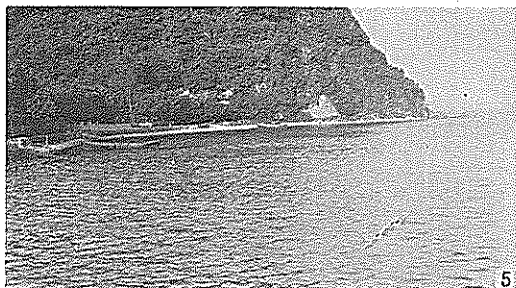
## 摘 要

- 1) ヒトエグサの着生は、本島沿岸いたる所にみられるが、地域により着生範囲、着生量は、底質の状態や風波の影響でかなりの差異が見受けられた。
- 2) ヒトエグサの着生基質は激浪により常時洗い流されことなく、動揺の少ない基質である。
- 3) ヒトエグサの生育は気温と密接な関係があるように思われる？。

## 文 献

- 1) 瀬底正武1970：沖縄におけるヒトエグサの増殖に関する研究—I、游走子の放出時期と葉体の生長、琉球試事業報告書P73~77
- 2) \_\_\_\_\_ 1969：ヒトエグサ養殖状況、琉球水研くろしお(11)P42~46
- 3) 琉球気象庁：1967年~1971年までの気象年報より

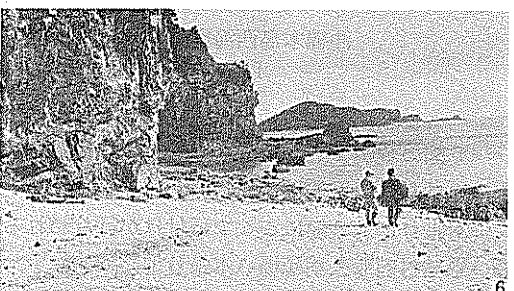
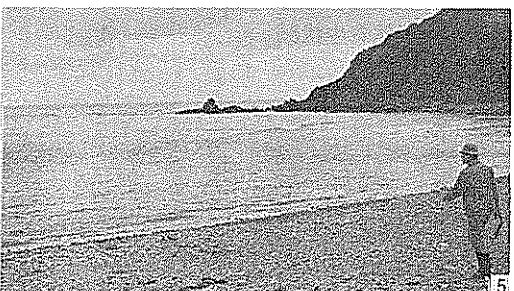
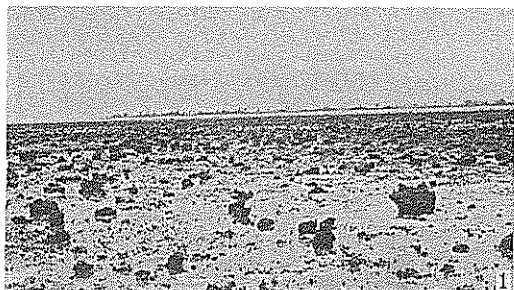




沖縄本島西海岸におけるヒトエグサの養殖地と天然着生状況  
〔Explanation of plate-I.〕

〔図の説明〕

- (1) 恩納村塩屋天然採苗場  
本張りに入る前にここで種付けが行なわれる。
- (2) 恩納村前兼久養殖場（本張り地）  
恩納村一帯は本張りとして利用出来る場所は多い、しかしながら山地開発による土砂の流出、観光化と養殖状況としてしだいに悪化していくのではなかろうか？
- (3) 名護市湖辺底天然彩苗場  
本張り地としては、あまりこのまじくないが種場としては利用出来る。
- (4) 本部町備瀬養殖場  
採苗場および本張り地として利用されている。現在200～300枚前後の網が張り込まれているが72年は生長がわるい。
- (5) 今帰仁村運天港に面した養殖場  
村や漁協の積極的な要請で68年から70年までの2年間養殖指導を行ない、ある程度の見通しを得た。
- (6) 屋我地養殖場  
種付けは恩納村塩屋で行なっている。摘採→洗浄→脱水→乾そうと全過程をきかいで行うため同場に工場が設置されている。
- (7) 岩上に着生する天然自生体  
緑藻類の中でもヒトエグサ属の場合には1日のうち2～3時間あるいは、4～5時間どうしても、干出しなければ成育はわるい。
- (8) 天然自主体の採集風けい。（恩納村）



# 沖縄本島東海岸におけるヒトエグサ養殖地と天然着生状況

[ Explanation of plate-Ⅱ.]

## 〔図の説明〕

- (1) 美里村泡瀬一帯 (2) 勝連村南風原一帯 (3) 勝連村平敷屋養殖場東海岸では養殖状況をそなえている地域は少ない。また、養殖適地が多いにしても石油企業の進出により将来は死の海となるであろう。?
- (4)、(5)、(6)、(7)、(8)、は国頭村一帯の主なる入江であるが、海岸は深く入りこみ波浪が激しく養殖地としては、不適当な地域である。